

平成 26 年 5 月 24 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520836

研究課題名(和文) 中世兵糧の基礎的研究

研究課題名(英文) A Fundamental Research on Military Provisions (hyoro) in Medieval Japan

研究代表者

久保 健一郎 (KUBO, Ken-ichiro)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：60257235

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本中世の兵糧に関わる史料を収集して、存在形態、地域の特徴、時期的変遷等を多角的に検討した。その結果、ほぼ日本列島全域において、兵糧には、実際に食糧として消費される「モノとしての兵糧」の側面と、交換手段・利殖手段として用いられる「カネとしての兵糧」の側面があること、兵糧はこれらを示しながら、時代が下るにつれ、いよいよ戦争の中で重みを増していき、戦国社会においては、いわば戦争経済の中心となることを明らかにした。これらは戦争論・社会経済史の発展に寄与する成果と考える。

研究成果の概要(英文)：This research collected the sources on military provisions (hyoro) in Medieval Japan, and explored from various perspectives, their existence forms, regional features and their transformations in each period. As a conclusion, this research clarified that military provisions, in almost all areas of Japan, had two aspects; one is "provisions as objects," which were consumed as food itself, and another is "provisions as money," which were used as methods of exchange and accumulation. Because of these two aspects, in more recent ages, military provisions became more significance during the wartime. In the war-raging states period, at last, military provisions became even the center of the war economy. The result of this research will be able to contribute progress of historical studies on wars and social economy in Medieval Japan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：モノとしての兵糧 カネとしての兵糧 戦争経済

1. 研究開始当初の背景

近年、日本中世史学界では戦争論が漸く盛んになりつつあるが、具体的かつ包括的な論点を提示できる問題を論じる必要を考え、戦争経済の視点から日本の戦国時代における兵糧について追究することにした。戦争経済の視点を導入したのは、戦争と経済との密接な関係が、近現代においてはむしろ当然のものとして捉えられるのに対し、前近代においてはほとんど追究されておらず、未開拓の分野だったからである。また、兵糧についていえば、それはいうまでもなく、戦争における最重要物資の1つであり、したがって、戦争経済の視点から兵糧について追究することで、戦争論において新たな、かつ重要な問題を明らかにできると考えた。これにより、いくつかの成果を公表してきたが、中世という時代においては、断続的に戦争が起こっており、そのいわば「総決算」が戦国時代である以上、中世を通じて兵糧がいかなる存在形態であり、またそれは地域的にいかなる特徴をもち、時期的にいかなる変遷を経ているか等の問題を追究して、もって国家・社会との関わりを見通す必要を考えるに至ったものである。

2. 研究の目的

日本中世における戦争と国家・社会との関わり、すなわち、戦争がいかなる規定性を中世の国家・社会に与え、また中世の国家・社会のあり方が戦争をどのように性格づけたかを明らかにし、それが近世に何をもたらしたかを見通すという研究の全体構想に基づき、本研究では、具体的に兵糧の問題を取り上げ、データベースを作成して、その存在形態・地域的特徴・時期的変遷等を明らかにし、もって日本中世史における戦争論・食糧問題論・社会経済史を前進させることを目的とした。

3. 研究の方法

文献史料のうち、刊本史料から日本中世の兵糧に関わる史料を、「兵糧」文言に注目して収集し、分析した。当たるべき史料の総数は膨大であり、未刊史料に当たることは本研究ではひとまず措き、刊本史料からのデータを得ることに集中した。兵糧について、日本中世を通じてデータを収集し分析した研究は、日本中世史においては類例がないのであり、刊本史料からの収集・分析でも十分な意義を有する。「兵糧」文言に注目するとの点も同様であり、「兵糧」文言がなくとも兵糧に関わる事例が多々あることは容易に予想できるところではあるが、膨大な史料について時間的制約があるなかで成果を上げるためには文言に注目するのが最も効率的であると考えた。ただし、史料上の表記は「兵粮」「兵糧」「粮物」等複数ありうるので、その点は配慮した。収集する対象の史料は古文書・日記・軍記とした。史料収集に当たっては、史料数の膨大さに鑑み、のべ4名の研究

協力者の協力を得た。史料の整理に当たっては、収集に協力を得た研究協力者とディスカッションを適宜行い、ノートパソコンへ入力してデータベースを作成し、それに基づいて分析を行った。

4. 研究成果

本研究での「兵糧」文言収集は、結果として、古文書が中心となり、記録・軍記物語は、補助的役割にとどまった。しかしながら、東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州から広く収集することができ、そこから多くの知見を得ることができた。まず、兵糧の存在形態、地域的特徴、時期的変遷について基礎的な成果を述べていく。

兵糧の存在形態について。史料上、「兵糧（兵粮を含む。以下同じ）」と表記される場合、それはほぼ米を指していることが指摘できる。もちろん、実際に食糧とされるものももっと多様であったわけであり、ここには米に対する特別な意識・価値観があったと考えられる。

兵糧は戦争に備え、主要な城郭や拠点の蔵に備蓄されているというのが通念となっていると思われるが、実は戦国時代には兵糧は蔵から流出を続けている。この原因にはさまざまなことがある。まず、家臣たちへの扶持給である。戦争で軍功をあげた家臣には当然恩賞が与えられなければならない、それは所領の加増によることももっとも望ましい。戦争で征服地を得られればその原資に充てられるわけだが、有力な戦国大名同士のしのぎあいになると、思うように征服地は得られない。そこで、大名の蔵から現物支給によって恩賞が与えられることとなる。

また、戦争状況が拡大すれば軍需物資の入手は増加の一途をたどり、その支払のために兵糧を用いることが頻発する。さらに戦争被害や飢饉などによる収入減を補填するために充てたり、そうした事情で耕作が思うに任せなくなった郷村に種貸しをするためなど、蔵からの兵糧流出の理由は枚挙にいとまがなく、放置すれば枯渇してしまいかねない状況だったと考えられる。ここに、「兵糧貸し」と呼ばれる方策が必要となる。すなわち、兵糧自体を運用し、利殖を図って増加させていくわけである。ただし、運用のためには兵糧はやはり蔵を出ていくのであって、蔵における兵糧の備蓄不足は恒常的にならざるをえなかった。

こうしたなか、いざ戦争になった場合、兵糧をいかに調達するかが問題である。かつて中世と近世の軍隊の違いが論じられるなかで、中世の軍隊は兵員が兵糧を自身で用意する（兵糧自弁）であるのに対し、近世の軍隊は支給されるところが注目された。これに対しては有力な疑義も提出されていたが、あらためて史料に基づいて検討した。

この結果、知ることができたのは、軍勢による必要な分の持参、自領内から戦地への搬

送、略奪・徴発・買付等による戦地での調達、戦地でのストック分などであった。このうち、軍勢による必要な分の持参は、「兵糧自弁」の事例としてあげられるものであるが、これは短期決戦に多いとみられる。すなわち、兵糧は基本的に「お荷物」であるから、機動性が重視される短期決戦では、必要な分の持参にとどまるわけで、戦地へ大量に搬送されるような場合は、戦闘が長期戦に持ち込まれてからの場合が多くなる。戦国大名の場合、こうした兵糧の調達方法について、さまざまな場合により、具体的に周到的な目配りをしているのであり、戦国時代に至って、戦争のなかに兵糧が確固たる位置づけを得ていくありさまには注目すべきと考える。

次に、地域的特徴について。これは、前述の通り、東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州から広く史料を収集したが、地域による他と比較した上での際だった特徴を見出すことはできなかった。これは、兵糧が中世における日本列島では、ほぼ同様な存在であったことを示す。

次に、時期的変遷について。兵糧は院政期末から鎌倉初期にかけてのいわゆる治承・寿永の内乱において、本格的にその姿を現す。まずは、戦地、戦地への交通路などで賦課され、徴集されるが、次の段階では源頼朝方に対して、給与のため確保されるようになる。これは、当初戦争の際の食糧であったものが、用途が広がり、事実上戦費となったものと考えられる。

これが、鎌倉後期、南北朝期、室町期と時代が下るにしたがって、在地の富を吸収するたんなる得分と化していく場合が増えていくものと考えられる。

さらに戦国時代になると、前述のように、戦争のなかに兵糧が確固たる位置を占めてゆき、またこれも前述のように、蔵の中からさまざまな理由で兵糧が流出し、活用されていく。兵糧は、中世を通じてその役割を拡大していき、戦国時代にはもっとも活発な動きを示すことになるのである。

以上、存在形態、地域的特徴、時期的変遷について得た基礎的な知見を述べてきたが、ついで、これらからさらに発展させた考察によって得た成果をあげる。

兵糧には、実際に食糧として消費される側面と、交換手段・利殖手段として用いられる側面がある。前者の側面を「モノとしての兵糧」、後者の側面を「カネとしての兵糧」と呼んでおく。

時期的変遷と併せ考えると、室町期まで「モノとしての兵糧」は、当然のことながら特に戦時において活発に用いられるが、「カネとしての兵糧」は時期が降るにつれ、多く見られるようになっていく。これは、前述したところからいえば、ひとつには戦費のかたちであり、いまひとつには戦時から平時に至っても、在地の富を「兵糧料」の名目で吸収することである。

「モノとしての兵糧」「カネとしての兵糧」は、戦国時代になるといよいよ盛んに用いられていく。再三触れてきた兵糧が戦争のなかに確固たる位置づけを得ていくのは、まずは「モノとしての兵糧」としてであり、これは「モノとしての兵糧」の深化といえる。また、やはり再三触れてきた兵糧の蔵からの流出、活用は「カネとしての兵糧」としてであり、これも「カネとしての兵糧」の深化といえる。戦国時代後半になって戦争が大規模化・長期化する傾向が進むと、「モノとしての兵糧」「カネとしての兵糧」の深化はいっそう進むことになる。「モノとしての兵糧」については、それを味方に大量に確保させること、その裏返しとして敵に確保させないことが重要になることは、言を俟たない。また、「カネとしての兵糧」については、さまざまな軍需物資を、兵糧を交換手段として入手していかなければならないために、重要になる。この背景には、撰銭による銭貨の信用低下と、モノとして、カネとして戦争で重視される兵糧（多くの場合、実態は米）の信用上昇がある。

流通のなかで活発に動き回る兵糧は、それを投下している人にとっては「カネとしての兵糧」だが、入手しようとする人にとっては「モノとしての兵糧」である。このように、「モノとしての兵糧」「カネとしての兵糧」の深化とともに、これらの、いわば錯綜も進む。

「カネとしての兵糧」について注目すべきは、史料上「兵糧」といいながら、実際にはたんなる代価となっている場合である。これは、前述のような「モノとしての兵糧」「カネとしての兵糧」の錯綜によって、モノとカネとの相互変換がやすやすと行われることにより、兵糧が銭貨と同一視されるようになったことを示す。これは、「カネとしての兵糧」の徹底ともいえる事態である。

このように活発な兵糧の動きを、戦国大名は何とか統制しようとするが、なかなかうまくいかない。それは、こうした兵糧の動きに実際に関与している商人であり金融業者・代官でもあるような階層に、大名がさまざまな局面、たとえば蔵の物資を委託して利殖を図ったり、年貢・公事の収取実務を委任したりなど、依存することが多く、彼らの動きを規制しきれないことによる。

それでも、大名の統制への志向は、戦国時代の後半に、ひとつの到達点を見る。関東の大名北条氏の場合、領国が侵攻される重大な危機に当たって、郷村の食糧を拠点城郭に集中することを命じている。そのやり方は、在地にある「兵糧」を村人が当座食べる分を残してすべて提出せよ、というものであり、いわば「兵糧」というレッテルを貼ることによって、領国内のすべての食糧を拠点城郭に集中させ、統制・管理しようとしたわけである。ここに、領国内の食糧はすべて潜在的に兵糧となった（あるいはなる可能性を示され

た)といえる。ただし、危機が去れば集中させられた食糧は返還されたと考えられるわけで、大名が収奪してしまえたわけではないことに注意しておかねばならない。

この大名によって示された兵糧の到達点までの変遷を改めて整理すると次のようになる。兵糧はそもそも戦争ごとに賦課されていたが、一方で兵糧料というかたちで戦費として収取されたり、あらかじめ年貢から控除されたりするようになる。これが戦国時代の後半になると、戦争状況の拡大に伴い、領国内の食糧がすべて潜在的に兵糧となり、領国危機の際には拠点城郭に集中させられ、大名により管理・統制されることが試みられる。

これは、一面大名の権力強化のようでもあるが、兵糧が戦争ごとに在地に賦課されることは原則としてなくなり、集中させられた兵糧も収奪されてしまったわけではない。このように、大名の恣意が制限されているところは重要である。また、すべての食糧が潜在的に兵糧となる以上、戦費として年貢から控除されることもなくなる。もちろん、敵地では兵糧は略奪あるいは恣意的賦課の対象であり続けるが、味方地ではあえて兵糧として賦課・収取する対象ではなくなるのである。

このような兵糧は、戦国時代においては、その経済を左右する重要な存在であるといえる。兵糧を中心として戦時に大量消費がされるのみならず、平時もそれに備えることが要求されるような経済を、ここでは戦争経済と呼んでおく。

戦争経済は、一方では甚だしい困窮を多くの人びとにもたらすが、他方では戦時の大量消費のなか活況すらもたらす。この双方のあり方を掘り下げていくことが重要である。

以上は、戦争論・社会経済史の発展に寄与する成果であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

久保 健一郎、中世東国における「兵糧」の展開、早稲田大学大学院文学研究科紀要、査読無、第57輯、2012、3 16

久保 健一郎、戦国時代の兵糧、歴史評論、査読無、755号、2013、19 32

6. 研究組織

(1)研究代表者

久保 健一郎 (KUBO, Ken-ichiro)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：60257235